別紙２

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名　坂本邦暢

本論文は、ルネサンス期の医者であり思想家であったユリウス・カエサル・スカリゲルの著作『顕教的演習』の思想的内容を詳細に分析し、その歴史的意義を論じたものである。スカリゲルは必ずしも科学史上著名な思想家・科学者ではないが、ルネサンスの科学思想を考察する上で、その重要性が近年になり注目されてきている人物である。彼の主著といえるその著作の研究は、ルネサンス思想ばかりでなく、近代科学の成立過程の歴史的検討に貢献することと期待される。

論文はすべて英文で執筆されている。本論文は序章と結論を含む１０章からなる。序章ではスカリゲルとその著作『顕教的演習』を取り上げる歴史的意義とともに、スカリゲルの伝記事項と今日に至るまでのスカリゲル研究を紹介する。本論文の中心を構成する第１章から第７章までは、同書の内容を７つの鍵となる重要概念をめぐり分析し、彼の思想・世界観の体系を明らかにする。第１章では、創造や三位一体などの神学的な概念について分析する。『顕教的演習』は同時代の思想家であるカルダーノへの批判が意図された著作であるが、第２章ではカルダーノの主張する世界霊魂という概念に対するスカリゲルの批判を説明する。第３章では、そのような世界霊魂という概念に代わって、多元的な能動原理が多様な形相を生み出し、それらが階層的な秩序を形成し、最善の世界を構成するという彼自身の哲学理論を解説する。第４章ではそのような理論による説明の一例として真空と場所の問題を取り上げ、真空を否定する彼の考えを説明する。第５章では神学で語られる天使の問題に触れ、神学的な知性について第一知性と下位の知性との関係を分析することで、天体の運行などに関する彼の説明を分析する。第６章では生成や発生の問題に関して、ガレノス、アヴェロエスなどの古代中世から同時代のジャン・フェルネルの思想までを追いかけた上で、スカリゲルのフェルネル批判、またその批判を通じて自然発生、発生の根源となる種子の問題、また発生との関連での霊魂の問題などに関する彼の議論を分析する。第７章では混合、または複合的な性質をもつ物体という問題に関して、複数の形相が階層性をもちつつ共存するという議論を展開していることを確認する。以上の７章で、同書の内容分析を通じてスカリゲルの思想は世界観の内容を明らかにしたが、第８章では、そのようなスカリゲルの思想を当時のパドヴァの思想状況や制度的状況の中に関連づけて、それがもつ歴史的な特徴を論じる。最後の終章で、以上の内容をまとめた上で、とりわけアリストテレス主義に関するこれまでの歴史研究に対する本研究の位置づけを述べる。

以上のように、本論文は、これまで十分に分析されてこなかったスカリゲルの主著『顕教的演習』を取り上げ、その内容の分析からキリスト教神学と整合させてアリストテレス主義を新たに解釈したスカリゲルの思想の全体を明らかにしようとしたものである。このスカリゲルの著作は、自然科学の歴史においては今まで科学史との関連においてあまり検討されてこなかったが、ケプラー、ガリレオ、ボイルといった近代科学の成立に関わった

科学者が、彼らの重要な業績を生み出す過程で読んだことが明らかにされており、その意味からも研究者から注目を受けてきているところである。

近代科学は、コペルニクスの地動説提唱からニュートンの『プリンキピア』出版に至るまでの科学革命によって生み出されたとされている。近年、このような天文学と力学に焦点を当てた科学革命論、また「科学革命」という概念そのものに対して再考が促され、他の自然科学諸分野（とりわけ錬金術・化学・物質論）に焦点を当てた歴史研究や、科学者や思想家らの影響関係を緻密に追跡する研究が進められている。それとともに、近代科学が生み出される上で乗り越えられるべき存在であったアリストテレス主義哲学に関しても、近代初期において理解されていたその哲学的内容が精査されてきているところである。アレクサンドル・コイレのガリレオ研究以来、近代科学の発達におけるプラトン主義哲学の役割が注目されてきたが、同時期におけるアリストテレス主義哲学に関しても、近代科学の形成にあたってそれがもった多様な関係や役割について再評価されつつあるところである。本博士論文は、このような近代初期におけるアリストテレス主義哲学の一つのあり方、同時代に影響力を及ぼしたスカリゲルの提唱する世界観としてのアリストテレス主義哲学を明らかにしたところが大きく評価されるところである。また特に第６、７章で論じた問題は、近代の物質論、生命論が生み出されていく過程の科学史研究に対しても、重要な寄与をしてくれるものと思われる。

審査は、科学史・哲学を専門とする教員とともに、ルネサンスの思想史を専門とする研究者によってなされたが、いずれも本論文は文献内容に対して優れた歴史的・哲学的分析を達成しており、博士研究論文として高い評価が与えられた。

したがって、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。